［論　文］

体験型授業の課題と展望
―「地域社会と子ども」の実践より ―

The Problem and the Vision
－ in Practice of Teaching “Community and Children” －

山　森　　泉[*1]　大　井　佳　子[*2]　金　森　俊　朗[*3]
中　島　賢　介[*4]　吉　田　若　葉[*5]

要旨

子どもにかかわる専門職を養成する幼児児童教育学科において2011年度より実施した体験型授業「地域社会と子ども」は、学生の満足度が高く、非参加型に比べ参加型ではより強く印象に残るものとなった。また、特定の職種に限定することの迷いを生じる一方で、意欲が高まりコース選択の参考になるなど、一定の成果があった。受け入れ施設の協力を得て可能な限り参加型の参観を目指すとともに、子どもを「見る力」をどのようにして育み伸ばすかが、これからの課題である。

キーワード：体験型授業／学士課程教育／子どもとのかかわり／見る力の育成

1．はじめに

2008（平成20）年12月24日に中央教育審議会より「学士課程教育の構築に向けて」（答申）が出された。その第2章 「学士課程教育における方針の明確化」では、「学生の視点に立った学習の系統性や順次性」がこれまでの教育課程においては配慮が十分されてこなかったことに言及している。一般的に、他分野に比べて教育系（保育系を含む）への進学意欲は高く、「自分の志望と大学教育に関する調査」でも卒業後にやりたいことが決まっている学生は70％を超えており、保健系に次いでいる。[1] しかし、教育系・保育系であっても30％弱の学生は卒業後にやりたいことが決まらずに入学しており、「目的意識の希薄化、学習意欲の低下等、学生の多様化により、大学側の対応の困難性」が増している点は、教育系・保育系においても同様に指摘できる。このような現状と課題に対応するために、「答申」では、「学生に目的意識を持たせ、学習意欲を喚起する観点から、地域や産業界との連携を深め、外部人材の積極的な参画を得たり、質の高い体験活動を積極的に設けたりするなど、開かれた教育活動を推進することも有意義である」と述べている[2]。

この点に関して、本学の教育課程はどうであろうか。本学幼児児童教育学科は保育士・幼稚園教諭・小学校教諭を養成することが主目的の学科である。したがって大半の学生はこれらの資格を取得して保育者・教育者になることを目指して入学してくる。本学の調査では、入学者の約90％は中学・高校時代に幼児教育・初等教育における現場体験活動を行っており、何らかの形で子どもとのかかわりを持っている。その一方で、全く子どもとのかかわりを持たずに入学する学生もいる。

* 1 YAMAMORI, Izumi
北陸学院大学　人間総合学部　幼児児童教育学科
日本語表現法
* 2 OOI, Yoshiko
北陸学院大学　人間総合学部　幼児児童教育学科
保育原理
* 3 KANAMORI, Toshirou
北陸学院大学　人間総合学部　幼児児童教育学科
社会科・生活科
* 4 NAKAJIMA, Kensuke
北陸学院大学　人間総合学部　幼児児童教育学科
日本語表現法・保育実習（施設）
* 5 YOSHIDA, Wakaba
北陸学院大学　人間総合学部　幼児児童教育学科
子どもと環境

2011年度入学者の場合、１割強の学生が保育所・幼稚園・小学校における体験活動を全く持たないまま入学している。(「現場体験・ボランティアに関するアンケート」調査（後述）[3]より)

本学では2012年度より全学改組とそれに対応したカリキュラムの変更を予定していたが、2011（平成23）年４月より保育士養成課程の改正に伴い、１年早く専門教育分野におけるカリキュラム変更を行った。変更の大きな柱は次の３点である。①２年次からコース制を取り、小学校教諭・幼稚園教諭を目指す「児童教育コース」と保育士・幼稚園教諭を目指す「幼児保育コース」のほか、幅広く人間について学ぶ「人間理解コース」の３つに分けたこと。②学科必修科目「地域社会と子ども」を入門科目として新設し、保育所～小学校段階までの子どもの概要を学ぶ講義と、見学・参加の体験活動を行うことで、子ども理解のための基礎的学びを導入したこと。③段階的・継続的な現場体験を重視して１年次からプレ実習及び免許取得に必修である幼稚園教育実習を実施し、３年次にはコースに応じた実習を行うようにしたことである。

本稿は、上記②に挙げた入門科目「地域社会と子ども」の取り組みについて報告し、学生の気づきや学び、授業担当者の話し合い等から見えてきた課題を整理し、今後の授業のあり方を検討したものである。

２．授業実践

１）科目「地域社会と子ども」の概要

本授業のねらいとして次の４点を学生に提示した。①学科必修科目であり、資格取得に必要な学びを行うための入門科目である　②学生は保育者・教育者として子どもにかかわる実践力の基礎を身につけるために、様々な環境において子どもとのふれあいを体験する　③各体験の前には子どもの発達とそれにかかわる今日的テーマでの概説が行われる　④講義と体験をとおして、専門科目の学びの方向性をつかむ、である。

授業担当者は、基礎ゼミも担当している６名が中心となり、講義の際には専門性を生かして学科の教員が多数関わるように割り当てた。下記が今年度のシラバスである。(表１)

中心となる授業担当者は基礎ゼミⅠを指導している教員とし、学外参観のグループも基礎ゼミのメンバーとゼミ教員を充てることで、学外活動やディスカッションがスムーズに進行した。依頼した学外施設は、これまで実習やプレ実習（小学校の場合は学習支援員としてのかかわり）で関係が出来ているところに３月中に打診して受け入れ了解を得た。15回の授業の中で４回の学外体験を実施したが、８回目、９回目、12回目の授業では大学から近くに位置する小学校５校、幼稚園５園、保育所５園に受け入れの協力を得て行った。

表１　授業シラバス

回	日	時限	内　　容
1	４月７日	木１限	オリエンテーション：科目を学ぶ意義、到達目標、学内外の体験活動の諸注意・マナー
2	４月14日	木１限	プレ実習について：資格取得のために必要な実習前体験学習と参加時の心得
3	４月21日	木１限	ボランティア体験の勧め
4	４月28日	木１限	Enjoy! ミッション実施について：行事における幼稚園児・小学生とのかかわり
5	５月12日	木１限	幼児期の子ども：幼稚園の子どもを中心に学ぶ
6	５月26日	木１限	児童期の子どもⅠ：小学生の発達・特徴、学習支援員について
7	５月21日	（土）	学外体験活動①：Enjoy! ミッション参加
8	５月26日	木1･2限	学外体験活動②：小学校参観
9	６月９日	木1･2限	学外体験活動③：幼稚園参観
10	６月16日	木1限	中間まとめ　補足説明・参観記録などの指導
11	６月23日	木2限	乳児期の子ども：保育所・子育て支援について
12	６月30日	木1･2限	学外体験活動④：保育所
13	７月７日	木１限	児童期の子どもⅡ：児童養護施設で暮らす子ども、学童保育を利用する子ども
14	７月14日	木１限	グループディスカッション・まとめ
15	７月21日	木１限	レポート発表
	７月28日		予備日

7回目に関しては後述する。行事や受け入れ施設側の事情も考慮しての日程であるため、事前講義の直後に現場体験を行うという理想通りにはいかない面もあったが、事前講義⇒現場体験⇒レポート作成・グループでの話し合いという流れはほぼ維持できた。

学生は、体験活動毎に指定の書式でレポートを書いてゼミ担当教員に提出する。またグループでも話し合いを行い、ゼミメンバーの学びや気づきを共有した。14回目の授業ではこれまでの学びを振り返ってゼミ内でディスカッションを行い、それも踏まえた最終レポートを作成した。それらの中から、ゼミ毎に2名の発表者をゼミ担当教員が選出して、全体を前にレポート発表を行った。さらに学生はこのレポ―ト発表を聞いたまとめレポートを作成した。

2）学生の現状　資格希望状況とボランティア体験のアンケートより

前述したように、2011年度入学生より2年次から始まるコース制を導入した。例年、4月のオリエンテーション期間の学科ガイダンスにおいて進路希望調査及び希望資格調査を行っているが、本年は予め各コース希望者の動向を把握するため、コース希望についても調査を行った。（表2）また、学生がどの程度入学前に現場体験やボランティア参加体験を有しているかについて、「地域社会と子ども」の2回目の授業において「現場体験･ボランティアに関するアンケート」調査を行った。（図1～5）

表2　コース希望調査結果

コース名	児童教育	幼児保育	人間理解	合計
小計	28	71	1	100

調査結果は、以下に記すとおりである。

各種免許資格の取得を「強く希望する者」は、小学校教諭が23％、幼稚園教諭が74％、保育士資格が68％となっている（複数回答可）。ほとんどの学生がいずれかの資格取得を目指して入学しており、入学段階でいずれの資格も強く希望していない学生は3％に過ぎない。コース希望については、児童教育コース（小学校・幼稚園教諭免許取得に対応）が28％、幼児保育コース（保育士資格・幼稚園教諭免許取得に対応）が71％、人間理解コース（認定心理士希望）が1％である。

小学校教諭免許を強く希望している者のうち83％の学生は、「児童教育コース」を強く希望している。同時に､78％の学生は「幼児保育コース」を希望しており、最初から小学校教諭・幼稚園教諭に限定して希望している者は入学者全体の5％程度である。そのうち、事前に小学校での現場体験・ボランティアに参加している者は1名のみであった。

幼稚園教諭免許を強く希望している者のうち91％、保育士資格を強く希望している者のうち94％が、幼稚園もしくは保育所で職場体験・ボランティアを経験しており、進路選択する上で職場での体験が一つの契機になっていると言えよう。大学入学までに、保育所・幼稚園・小学校のいずれもボランティアを含む体験を全くしていない学生は1割強（12％）である。

各施設における現場体験は、ほとんどが職場体験や授業の一環であり、一部に部活動単位でのボランティアを行っている。体験日数や時間は様々である。幼稚園での体験活動は全体の6割強が3日未満であるのに対し、保育所では逆に3日以上が8割を超えていた。学童保育で職場体験・ボランティアをした学生は少数だった。16％の学生

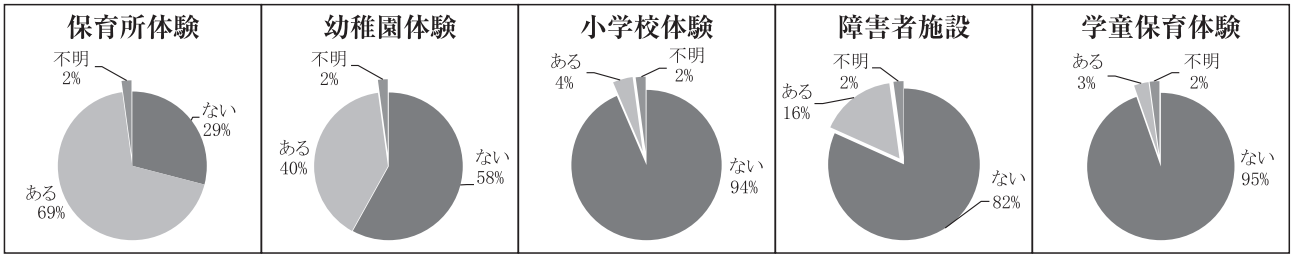

図1　保育所体験　　図2　幼稚園体験　　図3　小学校体験　　図4　障害者施設体験　図5　学童保育体験

が障害児施設でボランティア活動を経験しているが、部活動等での楽器演奏などが中心であり、長時間にわたって実際に障害児とかかわった経験を持つ学生は極端に少ない。

職場体験･ボランティアを経験した学生のうち、90％の学生が「印象に残ったことがある」と答え、74％の学生が「困ったことがある」と答えている。保育所・幼稚園・小学校以外の施設のうち、「児童館」の認知度・利用経験では、56％の学生が児童館を利用したことがあり、40％の学生は児童館の名前を聞いたことがあった。

３）資格取得に必要な実習について　プレ実習・免許取得希望者必携

本学人間総合学部（幼児児童教育学科・社会福祉学科）は、文部科学省 2009 年度～ 2011 年度学生支援推進事業「『高度な専門職人材育成』に連動した就職支援体制の構築」に採択されている。

本学科の場合、「プレ実習（本学独自の事前学習）」、「教育実習・保育実習」、「専門職インターンシップ」の三段階を設け、それぞれのステップを通して高度な専門職人材育成を達成する体制を整えている。2008 年度入学生より、資格取得希望の有無にかかわらず学生全員に「免許取得希望者必携」を配付し、各実習の受講前提条件について提示してきた。受講条件には、履修上の科目指定や条件、学生生活態度、プレ実習や基礎学力、実習に臨む姿勢などがあり、具体的な数値や行動を提示して、実習までに身につけさせたい事柄を学生が達成するための指針としている。

2011 年度からのカリキュラム変更に伴い、実習体制・実習時期も変更された。特に大きな変更は、「キリスト教保育」を体験的に学ぶ科目としても位置付けられた「幼稚園教育実習Ⅰ」であり、この履修を経て「児童教育コース」、「幼児保育コース」の２コースともに幼稚園教諭免許状取得のための「幼稚園教育実習Ⅱ」を行う。その前提科目であると同時に、１年次から子どもとかかわる専門職としての意識を高めることも科目設定のねらいとしている。また、幼稚園教諭として働く姿を一つのモデルとして、社会人力･コミュニケーション力の育成を図るねらいもある。新カリキュラムにおけるプレ実習も基本は変更せず、実施内容及び実施時期を見直し、それぞれの実習に連動させるように設定した。詳細は「免許取得希望者必携」に記載し、「地域社会と子ども」の授業内において資格取得をめざすために必要な態度・条件に関する説明を行った。

４）ボランティアの勧め

「地域社会と子ども」は、子どもにかかわる実践力の基礎を身につけるために子どもと触れ合う学外体験を中心とした授業である。学生は、この授業を通して、教育者・保育者が働く現場を一通りではあるが経験する。その後、プレ実習においてさまざまな現場経験を積み重ねることになる。その際、学生は「子どもたちと遊ぶ」といった単なる体験学習から脱却し、「子どもたちと教育者･保育者から学ばせていただく」ことへの謙虚な姿勢を身につける必要がある。そこで、第２回の授業を利用して「ボランティアの勧め」を実施した。

内容としては、〈ボランティアの語源〉、〈ボランティアの特徴〉、〈これまで行ってきたボランティア〉、〈これから行うボランティア〉、〈ボランティアの準備〉、〈ボランティア体験の検証〉をアンケート調査（２）学生の現状　資格希望状況とボランティア体験のアンケートよりを参照）を交えて講義した。

まず、ボランティアの語源については、自由意志（voluntas, ラテン語）、喜び（volonte, フランス語）、自ら進んでする（volunteer, 英語）などの語源を辿った。ボランティアは強制的に行われるものでもなければ与えられた仕事でもない。

次にボランティアの特徴として、自発性・自主性、社会性・連帯性、無償性・無給性の３点を挙げた。先述した語源から、学生の主体性を尊重しながらも社会的ニーズがあって初めて成立することも付け加えた。

アンケートに回答することで、今までのボランティアが多少なりとも進路選択において影響したことなどを学生に確認しながらこれから行うボランティアについて講義した。

また、これから行うボランティアは、実施する場所や仕事について事前学習する必要があること、先方に自分で連絡するには電話応対などのマナーが要求されること、限られた時間を有効に使

うため事前に計画を立てておくことが重要であることなど、ボランティアにあたっての準備内容を確認した。

さらに、ボランティアはただ実施すればそれでよいというのではなく、相手からより求められる存在になるためには何をどのように検証すべかといったことを挙げてみた。

①自分にできることから始めたか。
②相手の身になって接することができたか。
③相手との約束や秘密は守れたか。
④同じ立場で活動することができたか。
⑤周囲の理解を得てから活動することができたか。
⑥活動先で質問や相談ができたか。
⑦常に点検し、反省点を次に生かせたか。

授業の反省点としては、この授業が講義中心になってしまったことである。あくまでも体験学習中心の学びであるため、学生自身の振り返りと今後の展望のためには時間が必要である。だが、配当時間の関係で不充分な結果に終わってしまった。今後の課題は、例え僅かな時間でもボランティアについてグループ討論の時間を設けて発表させることである。

5）講義概要

前期15回の授業は、ほぼシラバス通りに実施できた。学外体験活動の実際と学生の感想・学びについては次項で述べることとし、この項では体験を伴わない講義等の概要を記す。

第1回：オリエンテーションとして実施した。科目設定のねらいや、参観先の紹介や提出レポート・評価方法、服装・学外参観時の注意事項などを、配布プリントに基づいて説明した。

第2回・3回：2－3)、2－4）参照

第4回：Enjoy！ミッション（北陸学院に学ぶ幼稚園児から大学生までが三小牛キャンパスに集って、土曜日の午前中に様々な催しを行う行事）について説明し、役割を決めた。幼児児童教育学科の学生は、本授業の一環として全員がかかわりを持つことになった。（バンブーアドベンチャー・エコおもちゃ作りにチャレンジ・英語であそぼう・たのしいことばあそび・ぼうしをおろう・院長やきそばの6つを担当した。）実際の準備は授業外の時間を充て、グループごとに行った。

第5回：幼稚園の子どもを中心に学ぶ：幼稚園教育要領を基に、各年齢の特性・運動発達・遊び、教師の役割について解説した。特に、見学の視点（事前調査した内容を踏まえた園環境の観察や一人の子どもに注目して遊びや人とのかかわりを見ていくなど）や、学生同士で固まらない、慣れ慣れしく接しない、低い位置から観察するなどの具体的な留意点を説明した。当日スムーズに参観に臨めるよう、見学する年齢（クラス）を予め指定した。

第6回：児童期の子どもについて学ぶ：授業・学習活動が中心となるため、教材・子ども・教師の三者の関係性（応答性・協力性）が具体的にどう展開されているか、育まれる力、問題点、課題、教師の仕事の緻密さなど、観察の視点を解説した。その後、金森が「ゴリラはゴリラ」の詩を取り上げて約20分の模擬授業を行った。後半では、学習支援ボランティアの制度及び、実習生として教育の場に入る際のマナーについても資料を配布して説明を行った。

第10回：乳児期の子どもについて学ぶ：保育所の歴史及び役割を説明した。次に、石川県の保育の現状、乳児保育・一時保育・休日保育・病児病後児保育等の保育サービスや地域子育て支援センター等についても資料を基に解説した。

第13回：児童期の子どもⅡとして、児童養護施設で暮らす子ども、学童保育を利用する子どもについて学ぶ：放課後児童クラブ（学童保育）の制度や仕組みを資料によって解説した後、具体的に把握できるように近隣の学童保育の様子を室内環境の写真を多用しながら説明

し、入所者の増加傾向やひとり親家庭の利用も増えていること、保育料が払えなくて退所するケースがあることなど、近年の傾向についても紹介した。児童養護施設：全国564箇所にある児童養護施設が増加中であり、入所年齢は２歳が最多であること、近年の入所理由は複数の理由があるものの親の虐待が第一位であることなどをスライドで資料に基づきながら解説した。反社会的行動に走る子どもや発達障害を持つ子どもなど、さらに、情緒・行動上の問題も多発している中で、安定的生活ができる暮らしの場としての施設が求められることを説明した。

第15回：レポート発表による振り返りと学びの共有：基礎ゼミごとに体験や講義の振り返りを行い、レポートを作成した。15回目はその発表として各ゼミ２名合計10名がレポート発表を行った。仲間が何を体験し学んだのか、また同じ体験をしながら異なる気づきがあることを知り、視点をどこに置いて参観をしたらよいのかなど、レポート発表を聞いて考えたことをさらに各自でレポートにまとめた。

６）学外体験

①　学院行事「Enjoy! ミッション」への参加

学外体験の１回目は、本学院行事「Enjoy! ミッション」への参加であった。この行事は、部局間の連携を目的として学院本部が主催し、例年５月に大学のキャンパスを会場として行われている。幼稚園児と小学校低学年は親子で参加し、幼稚園や小学校独自のプログラムの後イベントを自由に巡る。中高生は、大学の模擬授業体験の後自由行動となる。大学生はプログラムの最初からイベントを担当し、ローテーションを組んで準備から片付けまでの役割を担う。

幼稚園児から大学生が一堂に集うこの行事は、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格取得を目指す学生にとっては、様々な年齢の子どもと触れ合う絶好の機会となる。またイベントによっては、準備から片付けまでの一連の作業を体験するので、一つの活動を実施するには準備の段階から様々な配慮が必要であることも学べる。仲間との協働作業では、互いに刺激を受け合うことも多い。

今年度の「Enjoy! ミッション」で学生が体験したのは、大学のグラウンドと周辺に設けられた『バンブーアドベンチャー』『エコおもちゃづくり』『英語であそぼう』『楽しい言葉あそび』『ぼうしをおろう』『院長焼きそば』の６つのイベントであった。概ね企画されたイベントへ希望する学生が加わり、課外の時間を調整して準備が進められた。イベント企画に関しては、プランを考案する時点から学生中心で行うことが望ましい。しかし入学して間もない１年生が取り組むには、時期的に難しい問題もあるので、今後の課題としたい。その他６つのイベントに加え、保護者が同伴できない小学校低学年の子どもの引率やサークルのパフォーマンスへの参加などもあり、時間に追われる学生も多かった。

体験する内容は、イベントによって準備の段取りや当日の役割、子どもへのかかわり方が違うので、学生の学びも様々である。『バンブーアドベンチャー』では、竹ブランコと竹すべり台作り、丘での備え付け作業を通して、素材を工夫して遊具を創る楽しさ、理に適った物の扱い方等を学んでいる。当日は、元気に丘を駆け上がる子や自ら進んで挑戦する子、躊躇しながらも取り組む子や仲間どうしで励ましあう子たちの姿に感動し、常に安全に気を配る必要性にも気づいている。またそり滑りでの親子の様子を見て、親子一緒に滑るにはどうしたらよいかを考えた学生もいた。『エコおもちゃづくり』では、ペットボトルや牛乳パックを大量に用意する苦労もあったが、子どもたちが楽しく作って遊んでいる様子を見てやりがいを感じた学生も多くいた。また、道具の使い方や作り方の説明を聞く子どもの反応から、年齢と発達に応じた対応をしなければならないことに気づいた学生、複数の子どもに対して同時に手順の説明をする難しさを感じた学生もいた。『楽しい言葉あそび』は、授業で製作したオリジナル教材を用いて２年生が演じるコーナーで、１年生は言葉遊びの環境を整えるという役割を担った。子どもの目に留まるような看板を工夫して作り、当日は子

どもたちをテントへ誘導して、2年生の実践と子どもの反応を身近で観察することができた。『英語で遊ぼう』では、子どもとの英語でのやり取りを通して、子どもの吸収力に驚くと同時に学生自身の英語力の未熟さも痛感したようである。『ぼうしをおろう』では、折り紙や英字新聞で何種類もの帽子を折りながら、子どもたちと楽しく会話を続ける努力がみられた。『院長焼きそば』では、焼く時は作業に集中するが、販売担当の時は、声をかけてくる子どもとの対話を楽しむ傍ら、大勢の子どもと親子の姿に注目して、戸外での解放的な子どもの表情を観察することができたようである。

どの学生にとっても「Enjoy! ミッション」での子どもとの交わりが、新鮮で心動かされる体験となっていることを、事後レポートから読み取ることができた。イベントの作業を通して、また幅広い年齢層の子どもたちとの触れ合いを通して、数々の発見と気づきがもたらされた体験となった。

② 小学校参観

本授業の初めての参観は小学校5校であった。その内、2校は日常の授業が、3校は学校行事としての運動会が実施されていた。その参観においてねらいをどのように設定し、結果として何を学び取ったのかをまず明らかにしたい。

2校における授業参観のねらいについては、ほぼ「先生の指導の仕方と生徒の様子を学ぶ」(＝A)と「小学生の学習や活動と先生の対応を学ぶ」(＝B)に集約される。AとBの視点では、指導(教師)観や子ども観の違いがある。しかし、学生が意識的に区別して設定していないことは「気づき」を読むとよく分かる。

学生の観察や気づきの多くはB型が多い。4年生の算数の授業を参観した以下の学生の声が典型例だろう。「みんな手をあげていました。先生は最後の方に手をあげている人を当てていることに気がつきました。そして毎回みんなが手をあげるのを少し待っている様子でした。……先生はしっかり生徒全員を見ているということが分かりました。」「発表している子の目を見て、共感してあげてほめてあげたりしていた。……そうすると子どもたちもすごくうれしそうで教室の雰囲気がよくなっていった。」

以上のように総じて学生は子どもの様子とそれに対応する教師の姿勢、指導の仕方をよく観察をしていた。だからこそ「生徒の細やかな動きや言動を決して見逃さず、良いことは誉めて、悪いことは本気になって怒り……まるで先生と生徒で授業を作りあげているようでした。……あんな先生になりたいなという目標を持つことができました。」というように、教師への夢をより強めたという学生も生まれていた。直接訪問、参観の成果であろう。

では、運動会を参観した学生はどうか。参観のねらいは「教師の指導の仕方」に着目するよりも「学年による参加の仕方」「応援をしている子の心の動き」「子どもの主体性を見る」「どういう時先生を頼るのか」「子どもの協力の仕方」などに集中している。それは、運動会という学校行事＝特別活動の本質的要素が「自主性・主体性・自治的活動」であること、また運動会本番という教師の指導結果としての総体であることに学生は気づいているからであろう。

実際の運動会を参観した学生は、ねらいに設定した以上に多様な人、場面の観察を行い、我々の予想以上に豊かな学びをしていた。小学校の運動会は1年～6年まで、発達の著しい違いが現れる競技・表現を連続的に比較して観察できること、ひとつの種目について同時進行する競技・表現集団、応援者集団、準備補助集団、運営集団、それぞれにかかわる教師の動きが横断的に観察できること、自らの運動会体験記憶がまだ鮮明であることなどの故であろう。しかし、それらの条件は「印象に強く残った」という実感を弱めることになったと考えられる。

強い印象を残した学びの一つを紹介する。「私は車椅子に乗った障害者の女子に注目しました。ソーラン節では先生が付き添いおどり、障害物競争では児童が車椅子を押して走っていました。車椅子でも通れる工夫をして周りの人たちも協力していてとても助け合いの力を感じました。最後は自分の力でこいでゴールしていたのでとても感動しました。」

運動会参観の学生の多くは、次回こそ授業参観

をしたいと要望している。教師と子どものかかわりの具体的場面から強く学びたいという願いはよく分かるが、時間割の関係上難しい課題である。

５校二種の参観を通した全体的な課題は、姿勢･態度面の観察に終始せず、教材内容（文化の質）とのかかわりで教師の指導性と子どもの学びの質を少しでも読み解く力を育むこと、今後の学習につながる根源的な問いを参観後の交流によって持つことであろう。

③　幼稚園参観

５園のキリスト教幼稚園を訪問し、２時間程度の保育観察及び子どもとのかかわりの時間がもたれた。本年度より幼稚園教員免許だけでなく保育士資格・小学校教員免許取得のいずれかを取得希望の学生はすべて１年次１月にキリスト教幼稚園５日間の幼稚園実習Ｉを履修するため、幼稚園参観は学生が大学における「実習」をイメージする最初のステップとなるよう企図された。学生には訪問する園について事前調査レポートを作成することを課し、参観の留意事項として、子どもの目線で見ること、立ち位置として子どもの遊びの妨げにならない位置と高さに配慮すること、観察の視点を明確にして参観すること、具体的な観察の方法として、一人の子どもに注目して観察してみることと年齢による違いに注目して観察してみることを提起した。

学生は各幼稚園が開いているホームページ等を資料として各自で事前レポートを作成したが、その作業を通じて、園目標に触れたり、園舎や園庭の特徴を知ったり、行事予定や日々の報告のページから園生活を想像したりすることで、自分なりの訪問園のイメージの上に観察の視点をもつことができたようである。「子どもと接するときの先生の表情を見る」「年齢に応じた部屋の造りを見る」と視点を絞り込んで参観に臨んだ学生もいる。日程的に小学校参観の翌週に幼稚園参観があったため小学校との比較という視点も多くの学生が持つこととなった。最終レポートに、視点をもって見ることで見えてくるものが違ってくることに気付いたことが記されている。

訪問した５園は園児数 50 ～ 100 人の比較的少人数の幼稚園であったため、園児一人に注目して行動を追うことや、異年齢の子どもたちが同じ場所で遊ぶ姿を見ることができやすい環境であった。それでも、短時間の訪問者が園児とかかわることが子どもにとってどのような意味をもつと考えるかは園の文化によって異なり、園児とかかわらないで観察に徹するよう求められた園もあり、積極的に話しかけていっしょに遊ぶように、設定保育では活動を共にするようにと指示された園もあった。訪問日が年中・年長児が園外保育に出かける日であった園があったが、学生は、全園児による園庭での自由遊びと片づけ、クラスごとの朝のお集まりの姿を観察した後、園児が少なくなった園舎で建物・家具・教材・遊具・個人の持ちのもの・掲示物等を手に触れて見、さらに先ほどまで園児が遊んでいた園庭の粘土場で学生自身が遊んでみるという体験をした。しかし、事後の感想では子どもと遊べたことを喜び、遊べなかったことを不満に思う学生が少なくなく、「保育とは子どもと遊ぶこと」というイメージで保育者養成の課程に入学してきていることがうかがえる。

子どもといることを楽しめる感性、子どものために何かしたいと願う感性は保育者として重要な資質である。しかし、現代という時代が求める保育者像はその感性のままで進んでいける状況にはなく、「保育を見る力」の育成が必須である。現場で展開する保育はいうまでもなく実習においても、観察⇒記録⇒考察⇒指導計画⇒実践⇒観察……という循環で実践はとらえられ、この循環の過程で養われる「保育を見る力」が保育者としての資質を高めていく。今回、訪問した幼稚園によって参観の内容、体験が異なったことは、学生それぞれの参観の仕方、見方によって、子どもと保育について異なる発見がもたらされることへの気づきにつながるものである。離れて観察していると見えなくて子どもとかかわることで見えること、逆に子どもとかかわると見えにくくなり距離をおいて見てはじめて見えること、子どもといっしょに見ることで見えること、自分で触れてみてやってみて見えること……等、保育における「見る」ということに対する洞察の材料をもらうものとなった。後期の幼稚園実習指導へとつながる参観となった。

④　保育園[4]参観

学外体験の４回目は、幼稚園体験の３週間後に実施された。その間に基礎ゼミグループでのディスカッションを行って、これまでの参観での学びや気づきの共有を図った。保育園訪問では特に課題の指示や事前確認は行わなかったが、結果として半数の学生が、幼稚園参観に倣って自分が参観する保育園のレポートを作成し、準備をして保育園を訪問した。さらに、幼稚園訪問で見たり気づいたりした園内環境や子どもの姿を念頭において、参観のねらいを「幼稚園との違いを見る」とした学生も多かった。保育園には０歳から５歳までの子どもがいることから､「年齢による発達（あるいはおもちゃ）の違いを見る」ことを明確なねらいとしている学生もいた。

保育園訪問では、園児とのふれあいや一緒に遊ぶ等の体験をしたグループが多かった。体験をしたことにより、「ふれあうことで新たに分かったことがあった」「ただ見学するのとは違い、子ども同士の関係や年齢による遊びの違いをより近い距離で知ることができた」等の学びを得ている。見学のみだった保育園でも、０歳児から５歳児の姿を注意して見ることによって、年齢によって遊びや言葉の発達、友だちや先生との接し方の違いに気付いており、レポートに具体的にまとめることができた。園長先生から園の保育方針や配慮事項の説明を受けた後に見学をしたことで、何気なく思っていたことにも深い意味があるとわかったり、保育士は子どもを尊重してしっかり向き合うことに加え、保護者にも安心して預けてもらえるよう日々の努力が大切だとの保育士の責務・保護者支援の役割について学んだりした。

幼稚園との違いについては今回特に多くの学生が意識していた。０～１歳児の昼食時風景や担当制の保育を間近に体験したほか、ある園の一時預かりでは保育室にいる０～２歳児を同時に観察できた学生もいた。１歳児と２歳児の発語の違いや遊びの共有の始まり、同年齢でも個人差が大きいなど、授業で学んだことを現場で確認した学生もいた。保育園ならではの０歳児の担当制保育や複数担任制などから、幼稚園とは異なる保育者の人員配置や衛生面での配慮、乳児にもやさしい保育環境（遊具・食器・保育室の配置）などにも観察が及んだ。

約 90 分の見学・体験時間の中で、０～５歳の子どもを見てかかわることで、学生は年齢による発達や遊び方の違いに気づき、１～２歳児では「予想以上に言葉でのコミュニケーションができた/できなかった」の体験をした。参観した５園は比較的規模の大きな保育園（定員 150 名前後）であり、それぞれ独自の保育方針に基づいて保育を行っている。縦割り保育を行っている園では年長児を中心に学生に話しかけてくる子どもが多く、園児が大学生を質問攻めにしたり、遊びに誘ったりする姿が見られた。このような接点の多さから、「幼稚園の子ども達よりも保育園の子ども達の方が、外部の人間に慣れている」「幼稚園よりも保育園の方が開放的」という学生の感想が見られたが､果たしてそれは幼稚園と保育園の違いなのか、その学生の印象に過ぎないのではないか、あるいは、その園の持つ雰囲気なのかという点をきちんと理解していかなければならない。たった一園の体験で、幼稚園と保育園の違いのすべてが分かるわけではなく、また参観した時間も限定された短時間である。

授業でのアンケートでは、総じて学生の満足度が高い（印象に残った度合いが高い）参観となった。その要因として、これまでは参観のみだった学生にとって、直接子どもとのかかわり・触れあいができた園があったこと、また、幼稚園見学での注意事項と比較して観察をしたことにより、何を見るのか、見たいのかなど、学生自身がねらいを定めて参観できたことによる満足感があったと考えられる。また、今まで保育園とはかかわりがなく「保育園は自由に遊んでいる」イメージを持っていた学生が、実際の体験によってイメージが覆され、保育士資格も取りたいと考えるケースもあった。間違ったイメージで進路や資格を捉えている学生には、早期の体験型授業により視野を広げて進路を再確認する機会となった。一方で、小学校・幼稚園の参観に比べて子どもとのかかわりが多かったことに満足してしまい、逆に見落としていることはないか、見たこと感じたことがすべてではなく、多くの園を参観し観察することで幼稚園と保育園の違いや多様な保育のあり方を知ることにつながる点を、今後の指導で押さえていか

なければならない。

３．考察

１）アンケート結果

授業では、幼稚園体験の前に自分が参観する幼稚園について調べるレポートを課した。93％の学生が幼稚園のホームページを見てレポートを作成した。それにより、学生は訪問先幼稚園に親しみを持ち、参観意欲を高めている。（図６）幼稚園の後に参観した保育所についても（課題としていなくても）、半数の学生がレポートを作成していた。

学外体験は学生にとってどれも印象に残る体験となった。「とても印象に残っている」「どちらかと言えば印象に残っている」を合わせると、80～90％の値である。直接かかわる機会が少なかった小学校体験や担当する内容によってかかわる度合いに差があった「Enjoy ！ﾐｯｼｮﾝ」では、「あまり印象に残っていない・少々期待はずれだった」が20％近い回答となっている。（図７）

では、知識の伝授に限定しない体験型の本授業は、学生にどのような影響・効果を与えたのだろうか。アンケートでは、85％の学生が「講義と体験によりこれまでの子どものイメージ・理解に変化があった」と回答している。（図８）

変化の具体的内容で最も多かったのが、「どの職種にするか迷ってきた」45.1％である。次いで、「今まで以上に保育士になりたい気持ちが強くなった」「保育士資格に興味が湧いた」が各42.7％、「幼稚園教諭の資格に興味が湧いた」37.8％、「今まで以上に幼稚園教諭になりたい気持ちが強くなった」が29.3％、「小学校教諭の資

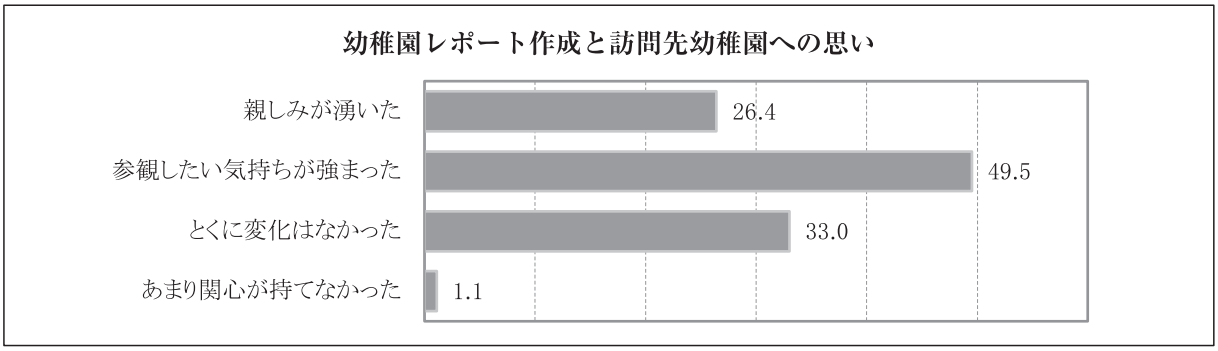

図６

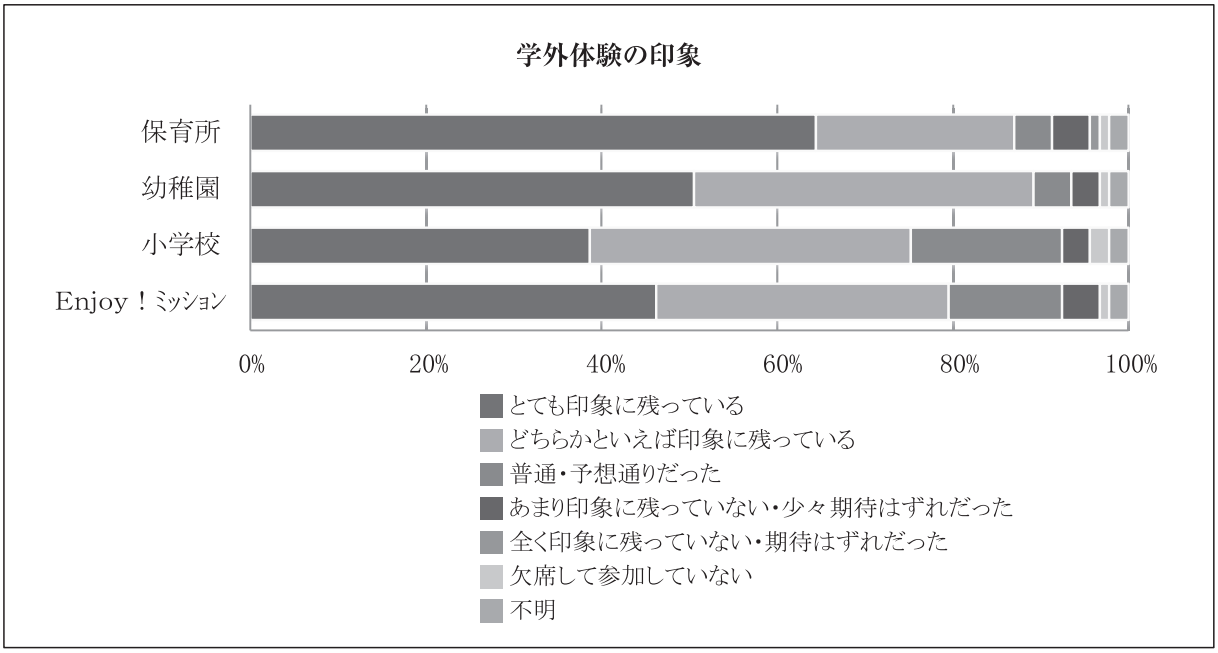

図７

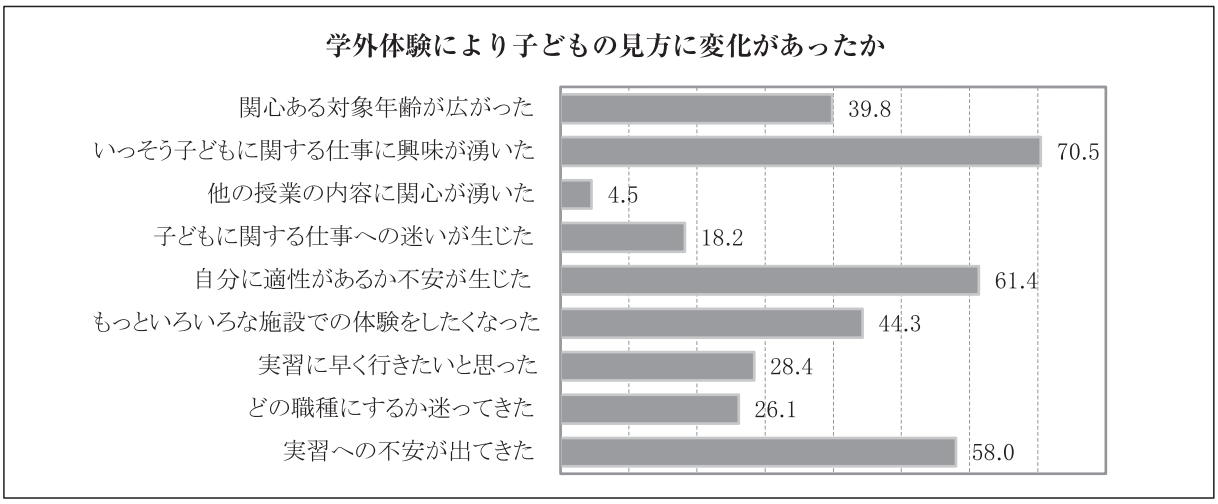

図８

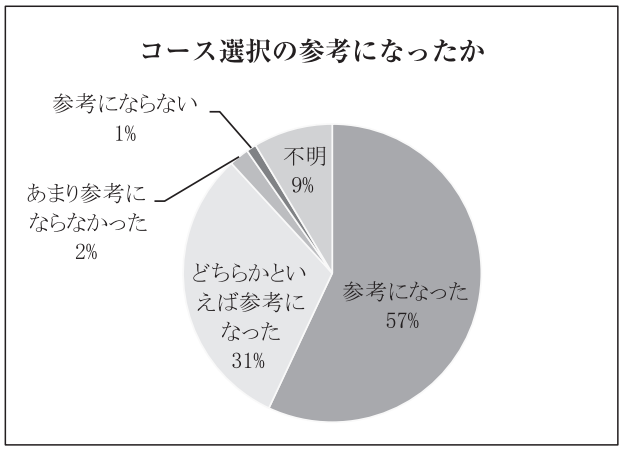

図９

格に興味が湧いた」24.4％となっている。さらに、「学外体験により子どもの見方に変化があったか」については、70.5％の学生が「いっそう子どもに関する仕事に興味が湧いた」と応えており、子どもにかかわる専門職を具体的に考えるという面において一定の成果があったと見ることができよう。一方、「自分に適性があるか不安が生じた」を回答した学生も 61.4％いる。憧れの段階から具体的な職種として養成校で学びを行う段階へという意識の変化が、このような数値となっているのではないだろうか。

本授業は「コース選択の参考になった」と 57.0％の学生が回答し、「どちらかといえば参考になった」31.2％を合わせると、88.2％の学生にとってコース選択の参考となっている。入学までに参観施設での体験をしていない学生のうち、「あまり参考にならなかった」「参考にならなかった」と答えた学生は、小学校体験で３名（3.8％）、幼稚園体験で１名（2.0％）、保育所体験で０名という少数であった。（図９）

２）実践から見えてきた課題

以上述べてきた学外体験活動ごとの課題とアンケート結果から見えてきた本授業の課題は、次の３点に集約できる。

①保育所では、子どもと実際のかかわりができた園（参加型）の印象が、そうでない園（非参加型）に比べ強く残っている。子どもと触れ合うことにより、子どもっておもしろい、子どもにかかわって自分も何かできるのではないか、という気持ちになるからであろう。その点、小学校ではどうしても「参観」のみに留まってしまうが、可能な限りの参加型参観を目指したい。

②参観をしたことで新たな問題意識を持つという点で、弱い学生が多い。例えば、小学校の運動会で騎馬戦を見た場合、そこに参加している子どもの様子を見た観察や感想は出てくるが、運動会で騎馬戦を行うのはどういう理由かなど、根源的な疑問を抱く学生は少ない。新しく生じた問題意識を自分の中で明確化し、それを広げていく力をどう育てていくか。また、常に子どもと接していて一時も目を話すことができない保育者は、子どもの連絡帳をいつどのようにして書いているのか。90 分の参観時間だけの感想や疑問に終わるのではなく、その前後に何が行われているのか。参観した日以前やそれ以後の活動はどう展開していくのか。実際に見たこと聞いたことを横に広げ縦に伸ばすという、時間的広がりに対する想像力

をどう育てていくかが、学生にとっても指導する側にとっても課題となる。

③参観し体験したことを通して見えてきたことがある。そこから、見えていないことを見通す力をどう伸ばすかも大きな課題である。見たことを土台として次の視点を持つためには、漫然と見るのではなく焦点を絞って見ること＝「見る力」をどうつけていくかが不可欠である。今年度の授業構成は、事前の講義（概説・注意事項）⇒参観・体験⇒振り返り（ディカッション・レポート）のサイクルで実施したが、「見る力」を育てるためには、事前の講義のあり方･中身が問われてくる。注意事項や概説は極力絞り込み（プリントで可能な内容は、予習教材として配布するなど)、子どもがいる具体的場面を提示して、そこで何を見るのか、各人の見た（理解した）ことをどう読み解くか、エピソード記録を活用してどのような解釈が考えられるかなどいくつかの具体的読み取りの例を学生に示すことも効果があろう。その流れを作ることで、見る力を育み、それを土台として参観の場で「見る」体験を通して個々の学生が「学び」を得ることができる。さらに、事後の学生同士の交流（ディスカッション）により、学びの共有や新しい視点の獲得も可能となる。

４．終わりに

保育者・教育者養成のステップから位置づけた場合、今年度実施した授業「地域社会と子ども」において教員引率による学外施設見学は、第一段階に過ぎない。次の段階で、学生自身が体験し学んだことをグループで話し合い、その結果をまとめたお礼状を作成して数人で訪問する。第三段階では専門分野を方向付けて、志向する仲間で自主的学習グループを結成し、体験や学びを深めていく。第四段階は本学でこれまで実施してきた「プレ実習」として、実習前の体験を重ねる。このような助走・準備段階を経て、第五段階が現場での実習となり、さらにはインターンシップへとつながっていくのである。

この流れをより効果的に生かすためには、実習先と同様に、本学の教育に賛同し学生を受け入れてくれる施設の確保が必須となる。今回は、これまでの実習等の関係から、小学校・幼稚園・保育所でそれぞれ５施設の協力を得ることができた。それは第一段階の見学場所を提供することにとどまらず、学生がその後の自主的・主体的な学びを実践していくフィールドとして、継続的なかかわりが可能でなければならない。しかし、保育所や幼稚園・小学校は、もともと子どもの養護・教育の場である。養成校とは独立した機関であり、大学側の都合だけでの一方的な依頼になってはならない。そのことを念頭に置きつつ、「実習ではない授業」での受け入れに協力していただける園・協力校への理解を得るために、本学科の学びのあり方（保育者・教育者養成の指針）をしっかりと定めた上で、学生の教育・指導を行っていかねばならない。

最終レポートに次のように書いた学生がいる。「初めての参観の時からもう３回目だ。１回目にはよく理解できていなかったねらいや注意がだんだんとわかってきた。緊張感もよいふうに感じ取ることができる。（中略）私が一番成長できたと思えたのは考え方である。１回目の時は、あの時自分はどうすればよかったのかなど、自分を中心とした反省ばかりだった。今は同じ反省でも、あの子はなぜあんな行動を取ったのか、どうしてあげたらよかったのかと、子どもを中心にした反省に変わってくるなど、自覚が出てきた」と。子どもにかかわる資格取得に限らず、観察し体験してはじめて分かることが多い。今回の授業で体験できなかった施設については、職員の方を講師に招いて「生の声」を聞くなど、子どもをめぐる環境について、さらに広く学ぶ機会を提供できるようにしたいと考える[5]。

「はじめに」で述べた「学士課程教育の構築に向けて」の答申では、入学時の所属決定や専門教育の早期化の動きが学びの幅を狭めることの懸念を指摘し、「自己決定力の未熟な学生もいる中、入学後の時間的ゆとりで専門分野を選択できる・変更できる仕組みづくりを検討課題とすべき」との改革の方向を示している[6]。本学科における２年次からのコース制導入はこの方向に沿ったものである。学生は入学時にどのコースにするのかを決めておかなくてもよいが、２年次からのコース選択を見据えて、１年次での体験型授業とそれに続くプレ実習や各種ボランティア活動が有効に連

動するような仕組みでなければならない。それがこの授業に携わる我々の検討課題である。

前項でも述べたように、本授業が「質の高い体験活動」となるためには、体験を「体験した」だけで終わらせないこと、各体験前の講義と体験後の振り返り（ディスカッション、レポート、課題の設定）を行うこと、コーディネーターの働き（学内、学外施設との連絡調整）があること、学生が学びの方向性を得られるように的確なアドバイスを行うこと等が必要である。今年度は実施に際して、基礎ゼミ担当教員６名がそのまま授業担当教員６名となることで、ゼミ単位で参観を行うことができ、学生を理解しつつディスカッションでの交流が進めやすいという利点があった。教員の本授業に対する共通理解も得やすく、一つの体験が終わるごとに問題点や課題を出し合うことができた。

今後もこの利点を継続し、学科教員の共通理解のもとで長期的な視点に立って改善していく姿勢が我々に求められている。

【付記】謝辞

謝辞：本授業を行うに際し、参観先として下記の施設にご理解・ご協力をいただきました。ここに記して感謝申しあげます。

小学校：扇台小学校、十一屋小学校、中央小学校、長坂台小学校、南小立野小学校

幼稚園：愛香南部幼稚園、川上幼稚園、桜木幼稚園、北陸学院第一幼稚園、若草幼稚園

保育所：泉の台幼稚舎、田上保育園、梅光保育園、平和保育園、若松保育園、（五十音順に記載）

なお、講義や資料提供、外部との連絡交渉などに協力を仰いだ幼児児童教育学科の教員は、下記の通りです。Enjoy！ミッション：多保田治江、学習支援員について：戸田教一、保育所について知る：福井逸子、放課後児童クラブ（学童保育）：田辺圭子、児童養護施設で暮らす子ども：虹釜和昭、引率・ゼミ指導：瀬川義明

＜注＞

1 平成20年２月に発表された結果「中央教育審議会大学分科会制度・教育部会及び学士課程教育の在り方に関する小委員会　合同会議　金子元久委員長発表資料」による。これによれば、「卒業後にやりたいことは決まっている」に「よくあてはまる」「ある程度あてはまる」の合計が、保健領域では98.72％であるのに次いで、教育系は74.3％となっている。

2 「学生課程教育の構築に向けて」（答申）第２章　16ページ　2008（平成20）年12月24日　中央教育審議会

3 「地域社会と子ども」の２回目の授業内で実施したアンケート結果による。2011年４月14日に実施した。有効回答数は98である。

4 児童福祉施設としての名称は「保育所」であるが、今回訪問した施設名（園名または法人名）がすべて「～保育園」であるため、本項２－６）－②においては「保育園」で統一した。泉の台幼稚舎の法人名は社会福祉法人泉の台幼稚園である。

5 本授業は前期開講科目であるが、1年次後期に実施されたキャリア講座として、児童養護施設・学童保育の職員の方の講義を聞く機会を設けた。講義後の質疑応答では、10名以上の学生から質問が続出するなど、ただ聞くという受身の姿勢ではなく、関心の高まりが感じられた。

6 「学生課程教育の構築に向けて」（答申）第２章　16ページ　2008（平成20）年12月24日　中央教育審議会